

## 秩父神社

秩父市の中央、母巢(ははそ)の森に鎮座する。秩父地方の総社で、祖神知々夫彦命が、崇神天皇の時代に先祖八意思金命(やごころおのみかねのみこと)を祀ったのが始まりと伝わる。徳川家康が再建した権現造りの社殿(県指定有形文化財)・幣殿・拜殿が並び、中でも左



▲秩父神社

甚五郎作「つなぎの籠」は有名。社宝の神輿は室町時代末期の作といわれ県指定有形文化財となっている。例大祭は、世に名高い秩父夜祭(12月2・3日)で笠鉾・屋台6台(国の重要有形文化財)が曳き廻される。7月の夏祭りは、川瀬まつりとして知られ、お川瀬、お祇園といわれ親しまれている。

## 音窪・白窪伝説

昔、あるとき東の空がにわかにも真っ暗になり、ひどい夕立になったかと思うと、突如大きな雷鳴がとどろき、白の形をした大きな氷が天から落ちてきたそうだ。その氷の落ちたところを「音窪」といい、その氷は夏なのに10日も溶けなかったという。

また、その時山に反射した大きな音が落ちた所が「音窪」。

近くに住む人たちは、その音で耳が聞こえなくなり、秩父市宮崎にある「きかずの神」にお詣りをして耳が治ったと言いつたらしい。



▲きかずの神

## 七ツ井戸周辺の見どころ



### 秩父札所18番 神門寺(ごうど)

本堂は名匠藤田若狭によるもので、江戸時代安政年間の建立とされる。特に龍・象・獅子の頭の彫刻は、迫力がある。

### 呑龍堂(どんりゅうどう)

明治14年頃、当地の浅見和平氏が太田呑龍上人を信仰し、健康回復上人像を拝戴帰郷して、神門寺東南側に堂を創建。その後、大正14年浅見氏の遺言により、秩父郡域から広く浄財を集め現地に呑龍堂を建立。今でも地元の人々がお堂を守っている。



▲呑龍堂

### 花見堂

宮地に落居した鉢形武者の集会所として建てられたもの。その近くに、樹齢数百年の彼岸桜の巨木があり、鉢形衆一同この花を見ながら、酒を酌み交わし語り合ったであろう事から、花見堂と伝えられている。今は、近隣の女性が集まり、堂守りを行っている。

## 妙見セツ井戸由来伝説

妙見セツ井戸には、妙見菩薩が秩父神社に合祀された際、渡っていったとされる伝説の他にも、二つのお話が伝わっています。

その一つは弘法大師が、水不足をいたく思召され清水を与えられたという筋のお話。

もう一つは、柳の精が清水の場所を教えたというお話です。

### 柳の精のお話

昔この土地は、飲み水を遠い荒川まで運びに行かなければならない、とても不便なところでした。そしてもっと恐ろしいことは、日照りが続く、その川の水がなくなってしまうことで、人々は大変困っていました。

日照りが続いたある日、一人の木こりが水をたっぷり含んでいるという柳の木を切り、大きな斧を持って出かけていきました。柳の木を見つけ、力いっぱい斧を振り上げて切ろうとしたそのとき、「木こりさん、どうか私を切らないでください。その代わりに水の湧きでる場所をお教えいたします。」驚いた木こりは、柳の木を振り仰ぎました。柳は、まるで懇願するかのように細い枝を風になびかせていました。「では、早速教えてくれ」と木こりが頼むと、柳は「今晚あなたの家を訪ねます。その時お教えいたします。」と答えました。



木こりは、柳の木を切るのをやめ家に帰りました。しかし、いつになっても柳の木は現われず「だまされたなあ。でも不思議なこともあるものだなあ。」とつぶやきながら、床に入るといつしか寝込んでしまいました。すると不思議なことに美しい女の人が現れ、「今日は私の命を助けて頂いてありがとうございます。約束の水の湧きでる場所をお教えします。私には、7人の子ども(小さい柳の木)がいます。その子どもたちの根元を掘ればきっときれいな水が湧き出るでしょう。」と告げました。木こりはあわてて目を覚まし、あたりを見渡しましたが美しい女の人はもうどこにもいませんでした。

翌朝、東の空が白々とするころ、木こりは柳の木を探しに出かけて行きました。しばらく行くと、教えられたとおりの小さな柳の木が立っており、早速根元を掘ってみると、きれいな水がこんこんと湧き出してきました。それから次々と7本の柳の木の根元を掘り、そのいずれからも美しい湧き水を得ることができました。それからというもの、水飢饉はなくなったそうです。(伝説の秩父 秩父園書館発行より)



### 七ツ井戸「道のりと所要時間」

大野原駅 約270m きかずの神 約420m 石経蔵 約100m 廣見寺 約120m 妙見堂 約40m  
 廣見寺の五本松の碑 約220m 大山祇神社 約310m 一の井戸 約490m  
 二の井戸 約580m 三の井戸 約100m 妙見塚 約120m 四の井戸・呑龍堂 約130m  
 五の井戸 約410m 六の井戸 約240m 七の井戸 約700m 秩父神社 約150m 秩父駅

※約4.5km およそ60分(見学時間は含みません)

### お問い合わせ

秩父市役所 産業観光部 観光課 TEL 0494-25-5209



秩父大宮

廣見寺妙見菩薩像



秩父まちなか

伝説の道

妙見セツ井戸



### 四の井戸

洗い場として今も近所の人達に、利用されている。



### 五の井戸

冷たい水の豊富な井戸、魚も泳いでいる。



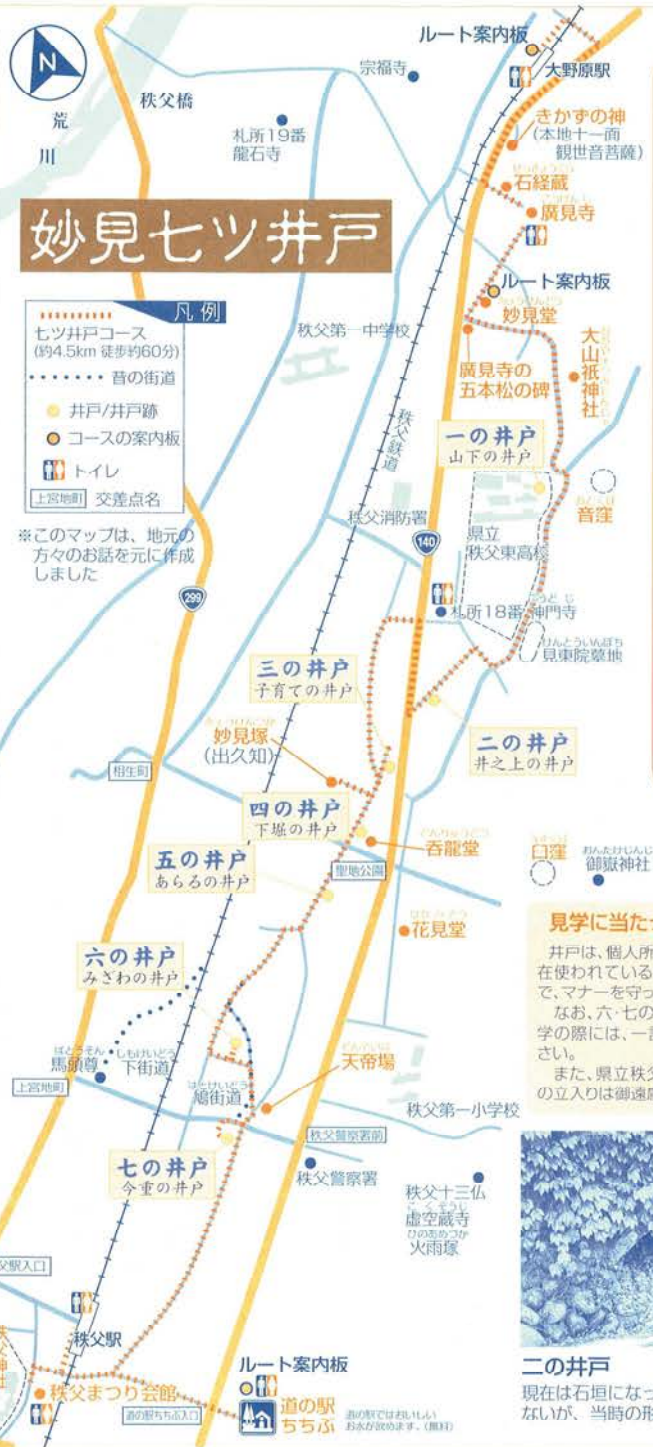
### 六の井戸

水量の豊富な井戸、周辺からは土器も多数出土している。



### 七の井戸

元の井戸は、建物の下となっており、少し離れた場所に囲いが整備されている。



# 妙見七ツ井戸

- 凡例**
- 七ツ井戸コース (約4.5km 徒歩約60分)
  - 音の街道
  - 井戸/井戸跡
  - コースの案内板
  - 🚻 トイレ
  - 上宮地図 交差点名

※このマップは、地元の方々の話を元に作成しました

## 妙見七ツ井戸とは

妙見七ツ井戸とは、妙見菩薩が秩父神社に合祀された際、宮地の妙見宮から秩父神社まで、渡っていったとされる七つの井戸(湧水)です。

妙見信仰は、平安時代末期、妙見神を氏神として信仰する平良文の移動に伴い、秩父にも流入したものとされています。

妙見宮は、当時、音窪(県立秩父東高校東側丘陵)という地点に祀られ、その後、山麓の大地(宮地)に移動したと伝えられており、それが現在の廣見寺付近であるとされています。

鎌倉時代(1235年嘉禎元年)、落雷のため秩父神社社殿が炎上し、その後社殿が再建されましたが、その際、妙見菩薩も合祀されました。播磨の国に、西国下行していた大河原氏は、神社再建記念として、太刀を奉納しましたが、その一振りには「正中二年(1325)七月、秩父妙見大菩薩」という銘が刻まれており、この銘文から、妙見菩薩が、秩父神社に合祀されたのは、1320年頃だったことが知られています。

## 見学に当たってのお願い

井戸は、個人所有であり、また、現在使われているものもありますので、マナーを守ってご見学下さい。  
なお、六・七の井戸、妙見塚の見学の際には、一言お声をかけて下さい。  
また、県立秩父東高等学校内への立入りは御遠慮下さい。



### 一の井戸

県立秩父東高校の格技場の周辺にあったと考えられている。



### 二の井戸

現在は石垣になっており水は出ていないが、当時の形を再現している。



### 三の井戸

石垣の奥にわずかに水が残る。乳の出が良くなるようにと、柄杓を供えて願をかけると伝わる。

## 妙見菩薩とは

北辰妙見菩薩、妙見尊星王(みょうけんそんしょうおう)とも言われる。北斗七星の主星である北極星を諸星の最勝として神格化したもので、災厄除去、国土擁護の菩薩とされる。

秩父神社の神札にみられる妙見神は女神。不動の天帝(北極星)を補佐する亀の背に乗って出現される。北斗七星の第七星を「破軍星」とする武神信仰の象徴である剣を持つ。



## 妙見塚(市指定有形民俗文化財)

正面幅6.5m、側面幅6.5mの石塚で、中央に妙見菩薩を祀る木製の小さなほこらがある。その両脇には、一對の円形の石があり、「妙見様の盛り石」と呼ばれている。

毎年12月、秩父夜祭の際には、秩父神社から奉納されたと伝わる「奉献妙見宮」(1863年文久3年)の文字の書かれた一對の幟旗を立てる。

宮地の一部屋台関係者は、12月3日の朝、妙見塚を参拝した後、屋台の奉曳を行っている。

## 廣見寺

明徳2年(1391年)天光良産禪師により開かれた、曹洞宗のお寺。開創の話として次のような話が伝えられている。

県立秩父東高校の東側丘陵地「音窪」の大きな池に棲む龍が、その麓に小さな庵を建て座禅を組む一人の旅の僧の前に現れた。しかし、かの僧は少しもひるむことなく黙々と座禅を続けるままで、その様子を見た龍は、よほどの高僧と思い、頭をたれて説法を請うた。僧は懇切丁寧法を説き、仏戒を授けると龍はうれしそうに姿を消した。そして数日後、一人の若者が僧の前に現れ、「先日のお礼にこの地を寄進しますので、寺を建てて人々のために法をお説きください。私はその寺を一生お守りします」といって龍に変身し、荒川の淵に消えていったそうである。

この僧こそ天光禪師で、龍は妙見菩薩の化身だといわれており、このお話は、廣見寺・妙見信仰・秩父神社の深いつながりを示唆している。

また、昔、廣見寺の門前には「龍灯杉」といわれる大きな杉の木があり、かの龍が灯した明かりが毎夜煌々と灯ったといわれている。残念ながらその木は枯れてしまったが、現在妙見堂の前に二代目が植えられている。

## 廣見寺石経蔵(県指定史跡)

廣見寺裏山の山裾の礫岩をくり抜いて作った広さ16.5㎡の石室に、数千個の川原石が蔵され、その石面に丹念に般若経が書かれている。

明和年間(1764~1772)の頃、住職大量和尚が仏教の功徳をたたえて作りあげたものと伝えられている。

なお、天保年間(1830~1844)の飢饉の際、寺の施米にあたって、この石経蔵が造られたという説もある。

